

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告 100

# 富山市内遺跡発掘調査概要 22

たかしま  
—高島遺跡—

2020

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告 100

# 富山市内遺跡発掘調査概要 22

たかしま  
—高島遺跡—

2020

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告 100

# 富山市内遺跡発掘調査概要 22

たかしま  
—高島遺跡—

2020

富山市教育委員会

## 例　言

1 本書は、個人住宅建築に先立ち令和元年度に実施した富山市高島地内における高島遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査は、富山市教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付を受けて実施した。

3 本書で報告する遺跡の概要は次のとおりである。

遺跡所在地　富山市高島地内

調査面積　60 m<sup>2</sup>

発掘作業期間　令和元年6月4日～令和元年6月25日

整理作業期間　令和元年6月25日～令和2年3月31日

担当者　富山市教育委員会埋蔵文化財センター　主査学芸員　細辻嘉門

　　　　　同　学芸員　泉田侑希

　　　　　同　嘱託　宮田康之

4 本書の執筆・編集は、埋蔵文化財センター職員の協力を得て泉田が行った。

5 現地調査から報告書作成にあたり、の方々よりご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表する（五十音順・敬称略）。

高島町内会　富山県教育委員会　生涯学習・文化財室

6 出土遺物・原図・写真は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。

## 凡　例

1 本書で用いた座標は世界測地系第VII系である。方位は真北、水平水準は海拔高である。

2 遺構は、種別を示す以下の記号と番号の組合せで標記した。番号は遺構種別にかかわらず、01からの通し番号を付した。

SD（溝） SK（土坑） SX（不明遺構）

3 土層、遺物観察表の色調は、『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。

4 挿図中の網掛けは次のとおりである。

■：地山 ■：油煙

5 参考文献は第4章の後にまとめた。

6 本文中の参考文献の表記について、一部を次のように略した。

教育委員会→教委

7 図3は、富山市基本図をもとに作成した。

8 図4は、国土地理院発行の1:50,000地形図「富山」・「魚津」をもとに作成した。

## 目 次

例言・凡例

第1章 調査の経過 .....	1
第1節 調査にいたる経緯 .....	1
第2節 発掘作業及び整理等作業の経過 .....	1
第2章 遺跡の位置と環境 .....	2
第1節 地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	2
第3章 調査の方法と成果 .....	6
第1節 調査の方法 .....	6
第2節 層序 .....	6
第3節 遺構 .....	8
第4節 遺物 .....	11
第4章 総括 .....	15
第1節 遺構・遺物 .....	15
第2節 まとめ .....	16
引用・参考文献 .....	16
図版	
報告書抄録	

## 図 目 次

図 1	高島遺跡位置図 (1/2,500,000) .....	2
図 2	高島遺跡周辺の地形分類図 (1/100,000) .....	3
図 3	高島遺跡調査位置図 (1/5,000) .....	3
図 4	高島遺跡周辺の遺跡 (1/50,000) .....	5
図 5	柱状図 .....	6
図 6	調査区全体図 (1/80) .....	7
図 7	遺構 (1) (1/40) .....	9
図 8	遺構 (2) (1/40) .....	10
図 9	遺物 .....	13
図 10	遺構変遷図 .....	15

## 表 目 次

表 1	遺物観察表 .....	14
-----	-------------	----

## 図版目次

図版 1	調査区全景
図版 2	調査区完掘状況
図版 3	調査区近景
図版 4	遺構
図版 5	遺物 (1)
図版 6	遺物 (2)

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査にいたる経緯

高島遺跡は、昭和63年度～平成3年度に富山市教育委員会が実施した市内遺跡分布調査により新たに確認した遺跡である。平成5年刊行『富山市遺跡地図（改訂版）』には「高島遺跡」（No.201041）として登載され、平成25年刊行『富山市遺跡地図』には、遺跡番号をNo.2010050に変更して登載された。現在の埋蔵文化財包蔵地面積は68,576m<sup>2</sup>である。

平成31年3月4日、当該地において個人住宅建築に伴い、埋蔵文化財の所在確認依頼書が提出された。対象地385.09m<sup>2</sup>全域が埋蔵文化財包蔵地に含まれており、4月16日に試掘調査を実施した。その結果、調査対象範囲の東側244m<sup>2</sup>で古代・中世・江戸時代の土坑等を検出し、土師器、近世土師器、瀬戸美濃、越中瀬戸が出土した。

工事対象範囲全域で埋蔵文化財の所在を確認したため、試掘調査の結果に基づき、埋蔵文化財の保護措置について工事主体者と協議した。その結果、住宅の工事計画のうち、地盤改良工事が遺跡の保護層を越えて掘削され、埋蔵文化財を現地で保存できないことから、埋蔵文化財所在範囲137m<sup>2</sup>のうち60m<sup>2</sup>については、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。それ以外の埋蔵文化財所在範囲は現状保存とした。

文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、施主から令和元年5月10日付で市教委へ提出され、市教委の副本を付けて同日付け30埋文353号で富山県教育委員会へ提出した。文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の報告は、市教委から令和元年6月7日に富山県教育委員会へ提出した。

### 第2節 発掘作業及び整理等作業の経過

**発掘作業** 発掘作業は土木会社に掘削業務を委託し、埋蔵文化財センター職員が常駐して調査の監理にあたった。作業期間は、令和元年6月4日から6月25日である。

現地事務所・仮設トイレは6月3日に搬入・設置した。発掘作業開始前に、工事主体者側の建設業者に住宅工事範囲を示してもらい、発掘調査対象範囲を設定した。バックホウによる表土掘削は6月4日から実施し、同日に完了した。排土は調査区外に横置きした。翌5日から人力による遺構検出・排水溝の掘削を開始した。掘削作業と併行して遺構概略図を作成した。6日から検出した遺構の掘削を開始した。掘削を終えた遺構から順次、平面図・断面図を作成した。測量作業は世界測地系座標を使用し、トータルステーションを用いて行った。

6月14日に遺構掘削作業を完了し、6月18日に高所作業車による全景写真撮影を行った。同時に埋蔵文化財センター所長による現地作業完了確認を行った。6月19日に現地埋め戻しを開始し、同日に完了した。6月25日に現地事務所・仮設トイレを撤収して発掘作業を完了した。

**整理作業** 整理作業は、現地調査完了後の令和元年6月26日から埋蔵文化財センターにおいて行った。遺物は遺構出土遺物が少なく、かつ破片が多かったため、出土遺物の実測にあたっては、口縁部や底部が残るものはできるだけ図化するよう努めた。併行して原稿作成、遺物写真撮影を行い、令和2年3月31日に本書を刊行し、業務を完了した。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

富山市は富山県のほぼ中央部に位置する。富山市の地勢は、大まかに山間部と平野部に大別され、南が高く北が低くなるという地勢を示しており、海岸から標高3,000m級の高山地帯まで変化に富む。

富山市中央部の大部分を占める富山平野は、神通川・常願寺川とその支流によって発達した扇状地・氾濫平野で形成され、北は富山湾、東は早月川扇状地、西は呉羽丘陵、南は飛驒山地から続く丘陵に接する。

常願寺川は県南東部の山岳地帯を水源にもつ。急流河川のため、古くから洪水や土砂崩れによる災害が発生し、上流部に立山カルデラの大崩壊地があることから、莫大な量の土砂を平野部に供給し、広大な氾濫平野を形成した。現在でも市内東部で調査の際に、その洪水堆積を確認することができる。神通川流域の扇状地は比較的小さく、下流の市街地以北は流路変遷の跡や自然堤防・後背湿地が広がる。

高島遺跡は、富山湾から約3km内陸に入った常願寺川左岸の自然堤防上に位置する。遺跡周辺は神通川と常願寺川に挟まれ、その堆積によって形成された氾濫平野である。現在の遺跡周辺は、整地や場整備によって平坦な地形を呈するが、明治期の地図に残された水田の形状を細かく観察していくと、旧河川跡が確認できる（富山市教委2002）。これらの河川が発達して形成された微高地に遺跡が点在する。調査区周辺の標高は約6～7mである。

調査区は高島地内の中央南側、遺跡の中央部に位置する。調査区を取り囲むように宅地が立地し、その周辺一帯は水田耕作地帯が広がる。対象地の現況は宅地である。調査区の南300m先には、国道415号線が東西に走り、南西500m先には、富山県運転免許センターがある。西～北2km先には、あいの風とやま鉄道が東西に走り、北西1.8km先には東富山駅が所在する。東1.4km先には常願寺川が流れる。

### 第2節 歴史的環境

高島遺跡と常願寺川流域の縄文時代から中世までの遺跡について概観する。

本遺跡は過去に試掘調査を5度実施し、遺構・遺物は確認していない。本発掘調査は今回が初めてである。分布調査では、縄文土器（後期・晚期）や弥生土器、古代土師器が採集されている。本遺跡が所在する常願寺川の氾濫平野では、旧石器時代から縄文時代中期までの遺跡が、これまでに発見されていない。縄文時代前期にピークを迎えた海進により、海岸線は現在よりもかなり内陸に入り込み、遺跡周辺は海の底となっていたと考えられる。

**縄文時代** この地域に遺跡が出現するのは、現在のところ縄文時代後期初頭と考えられる。低地の中でも微高地や河岸段丘上に遺跡が分布する。岩瀬天神遺跡（2）、宮町遺跡（3）、水橋荒町・辻ヶ堂遺跡（4）では、縄文時代後～晚期の土器が出土した（富山市教委2002a、野垣2005）。浜黒崎野田・平榎遺跡（5）では、自然地形を利用した縄文時代後期～晚期の土器捨て場を検出した（富山市教委1996）。縄文時代後期後半～晚期には、市内全体では遺跡が減少傾向であるのと相反して、この地域での遺跡数が増加する。

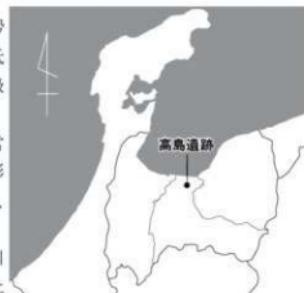


図1 高島遺跡位置図 (1/2,500,000)

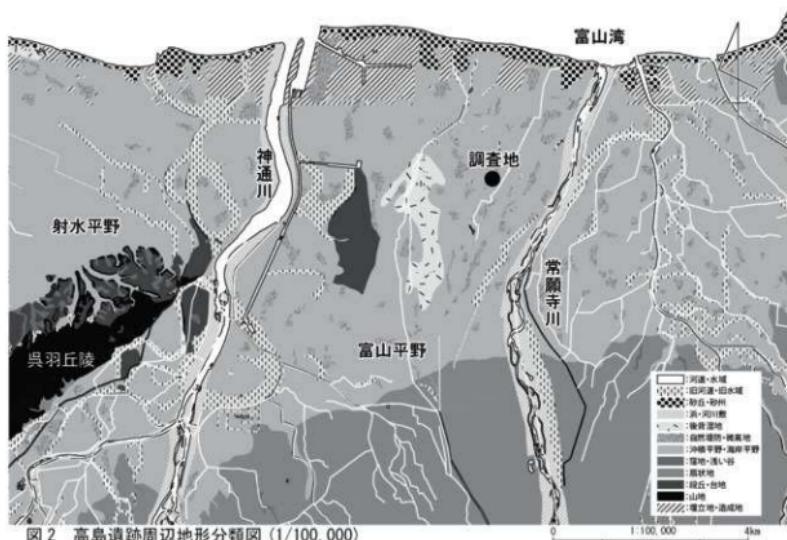


図2 高島遺跡周辺地形分類図 (1/100,000)



図3 高島遺跡調査位置図 (1/25,000)

**弥生・古墳時代** 繩文時代と同様に、微高地や河岸段丘上に遺跡が分布する。弥生時代前期の遺跡は本遺跡周辺では確認していない。弥生時代中期後半には遺跡が散見される。市内でも早くから農耕が行われており、短期間で廃絶することから、一帯で場所を変えながら集落を営んでいたと考えられる（富山市教委 2007）。弥生時代後期後半には遺跡数が増加し、古墳時代まで存続する。

針原中町I遺跡（6）では弥生時代中期後半の堅穴状遺構を確認し、浜黒崎悪地遺跡（7）では、弥生時代後期頃の集落が小規模ながら形成され、短期間で廃絶する（富山市教委 1994a・1997）。宮町遺跡（3）では、多数の溝や祭祀を行ったとされる井戸を検出した。また、弥生時代中期後半～後期の土器、ヒスイ・碧玉・鉄石英などの石材、勾玉・管玉が出土し、玉作りを行っていた集落を確認した（富山市教委 1994b・1995）。

飯野新屋遺跡（8）では、弥生時代終末期～古墳時代初頭の建物跡や井戸跡を検出し、井戸の中から破碎された赤彩土器が出土した。集落内での井戸祭祀が推定されている（富山市教委 1984・1987・1995）。古墳時代前期には、方墳のちょうちょう塚（9）が築かれる。ちょうちょう塚の周囲には、弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡が数多く存在することから、この地域の開発を進めた人物の墓と考えられる（藤田・駒見 1981、富山市教委 1995）。ちょうちょう塚に近接する豊田大塚・中吉原遺跡（10）では、弥生時代後期～古墳時代前期にかけて、湿地の肩部に祭祀土器の大量廃棄を確認した（富山市教委 1998）。古墳時代の集落は、古墳時代前期まで確認できるが、中期以降は確認していない。

**古代** 奈良・平安時代に入ると遺跡数が増加し、この地域では越中でも重要な遺跡が集中する。米田大覚遺跡（11）では、8世紀末～10世紀初頭の廐付建物、長舎建物がL字形に配置されることを確認し、新川郡衙の郡庁域と推定されている（富山市教委 2006）。遺物では、婦負郡の郷名である「罫本」と記された墨書き土器が出土し、郡城を越えた交流があった証拠となりうる資料である（富山市教委 2012）。豊田大塚・中吉原遺跡（10）では、人面墨書き土器や畜串、人形などの祭祀遺物が出土し、米田大覚遺跡（11）との位置関係から、新川郡衙の祭祀場と考えられている（富山市教委 1998a、堀沢 2003）。水橋荒町・辻ヶ堂遺跡（4）では、平安時代の掘立柱建物、区画溝、道路跡が検出された。この遺跡は『延喜式』に記載され、越中国内に置かれた八駅のひとつ「水橋駅」に比定されている（富山市教委・富山市埋蔵文化財調査委員会 1998b・1999）。

**中世** 中世に入ると数多くの集落や城館が、本遺跡が所在する常願寺川系扇状地上に形成される。本遺跡周辺は、宮町遺跡（3）、宮条南遺跡（12）、高島島浦遺跡（13）、針原中町II遺跡（14）、小西北遺跡（15）が所在する。これらの遺跡では中世の掘立柱建物や井戸・区画溝などが確認されており、中世集落が密集している地域である（富山市教委 1997・2000）。

本遺跡の西方には宮町遺跡（3）が所在する。13世紀～14世紀頃の集落を検出し、集落内部は溝によって区画され、区画内には掘立柱建物や井戸が検出されている。羽口・砥石・鉄滓などの鍛冶道具、漆布が付着した珠洲が出土していることから、鍛冶職人や漆職人などが存在する町屋的性格が強い集落遺跡と推定されている（古川 1995、富山市教委 2000）。小西北遺跡（15）では、区画溝や土星跡などの居館遺構を検出し、「三つ盛り丸に三頭右巴」紋が描かれた漆器が出土していることから、神保氏に縁がある館跡と考えられている（富山市教委 2000・2007）。さらに、小西北遺跡（15）と宮町遺跡（3）は隣接しており、両者の存続時期も同時期であることから、町屋敷とこれを統括する盟主的な武家屋敷という一体化的な関連をもつものと考えられている（古川 2000）。

本遺跡の東方には平榎龟田遺跡（16）内に平榎城跡、南方には新庄城跡（17）、北方には大村城

跡(18)や日方江城跡(19)が所在する。これらは戦国時代の城館である。平榎亀田遺跡(16)内には、文献から16世紀初頭に塙崎氏が築城し、16世紀末に上杉氏により落城した平榎城が存在していたと推測されている(館盛1980)。新庄城跡(17)は、富山から水橋へ抜ける交通の要衝に所在し、上杉氏が越中支配のために拠点にした城である。発掘調査では、室町時代～戦国時代の堀を伴う土塁などを検出した。これらの遺構は、室町時代の有力者の館に関連があり、戦国時代に入ると、これらの遺構が大型化し、館から大きな城郭へと作り変えられることを確認した。



- |           |            |           |               |              |           |
|-----------|------------|-----------|---------------|--------------|-----------|
| 1.高島遺跡    | 2.岩瀬天神遺跡   | 3.宮町遺跡    | 4.水橋荒町・辻ヶ堂遺跡  | 5.浜黒崎野田・平榎道路 | 6.針原中町Ⅰ遺跡 |
| 7.浜黒崎悪地遺跡 | 8.旅野新屋遺跡   | 9.ちょうちょう塚 | 10.豊田大塚・中吉原遺跡 | 11.米田大覚遺跡    | 12.宮条南遺跡  |
| 13.高島島浦遺跡 | 14.針原中町Ⅱ遺跡 | 15.小西北遺跡  | 16.平榎亀田遺跡     | 17.新庄城跡      | 18.大村城跡   |
| 19.日方江城跡  |            |           |               |              |           |

図4 高島遺跡周辺の遺跡(1/50,000)

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

発掘調査区は、個人住宅の地盤改良工事によって遺跡保護層を超えて掘削される範囲である。

調査前に工事主体者に工事の掘削予定範囲を示してもらい、範囲を確認のうえ調査に着手した。

**発掘作業** 表土掘削はバックホウにより行い、排土は横置きした。表土掘削が完了した場所から、ジョレンで人力による遺構検出作業を行った。出土遺物は、トータルステーションによる座標取り上げとした。

遺構掘削は移植ゴテを使用した。基本的に半蔵して掘り下げ、必要に応じて写真撮影と断面図作成を行い、その後完掘した。

地下からの湧水が多く、掘削すると遺構内に水が溜まるため、常時、排水しながら作業を行った。

**記録作業** 測量基準は世界測地系第VII系を使用し、図化作業はトータルステーションを用いて行った。概略図は縮尺1/100、平面図・断面図は1/20で作成した。遺構出土遺物は、座標を記録した後、取り上げた。写真はフルサイズデジタル一眼レフカメラ(2493万画素)を使用して撮影した。掘削作業完了後、高所作業車による全景写真撮影を行った。

**整理作業** 出土遺物量はコンテナ3箱分である。発掘作業終了後に遺物洗浄と注記等の基礎整理を行った。遺構や搅乱層からの出土遺物が大多数を占めるが、すべて破片である。遺跡の全容を把握できるよう、口縁部が残るものだけでなく、その他の部位もある程度の大きさの破片はできるだけ図化した。遺構・遺物のトレースは原図スキャン後、デジタルトレースを行った。遺物写真撮影はフルサイズデジタル一眼レフカメラ(2493万画素)を使用して撮影した。

### 第2節 層序(図5)

調査区は宅地で、現地表面の標高は6.5mである。

基本層序は上層から順に、I層：表土・搅乱、II層：地山(褐色砂・にぶい黄褐色粗粒砂)である。遺物包含層は確認できなかった。地山上面において、中世・近世の遺構を確認した。地山は、部分的に後世の掘削で搅乱を受けており、遺構の残存状態は悪い。

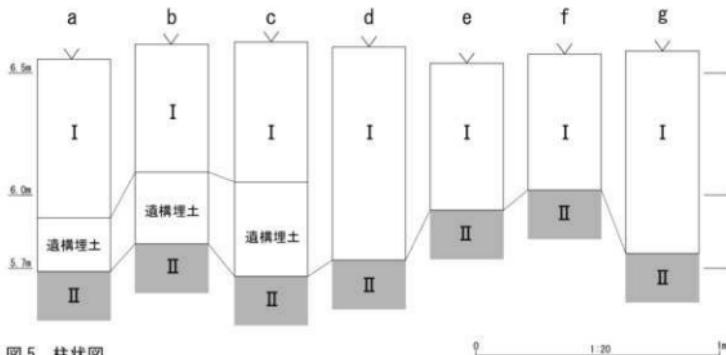
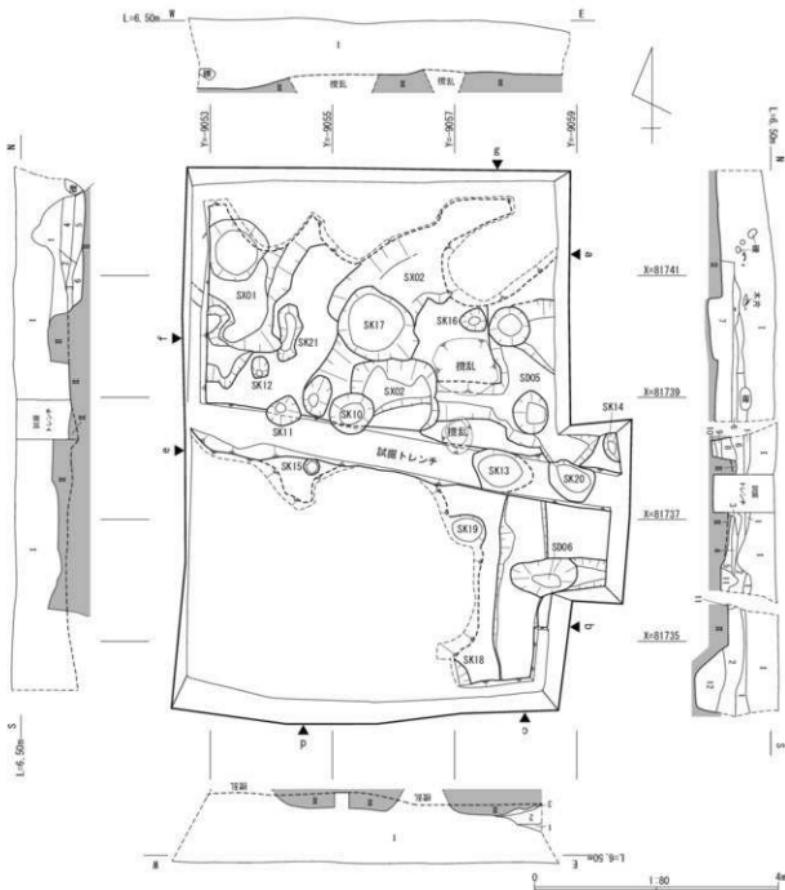


図5 柱状図



調査区西壁

- 1 黒褐色シルト(褐色中粒砂少量まじる)(SK01埋土)
- 2 黒褐色中粒砂(Ⅱ層ブロック・有機物まじる)(SK01埋土)
- 3 黒褐色シルト(SK01埋土)
- 4 黒褐色シルト(灰褐色中粒砂ブロックまじる)
- 5 褐褐色シルト(黒褐色シルト・Ⅱ層ブロックまじる)
- 6 黒褐色粘土(Ⅱ層ブロック・有機物まじる)
- I 表土・搅乱
- II 褐色中粒砂・にぶい黄褐色粗砂

調査区東壁

- 1 暗褐色粗粒砂
- 2 灰黄褐色粗粒砂
- 3 黑褐色中粒砂
- 4 黑褐色粗粒砂
- 5 喀斯特粗粒砂
- 6 黑褐色粗粒砂(暗褐色中粒砂まじる)
- 7 黑褐色中粒砂(S005埋土)
- 8 黑褐色中粒砂(SK14埋土)
- 9 黑褐色シルト(SK14埋土)
- 10 黑褐色シルト(SK14埋土)
- 11 黑褐色シルト(S006埋土)
- 12 黑褐色中粒砂(S006埋土)
- I 表土・搅乱
- II 褐色中粒砂・にぶい黄褐色粗砂

調査区南壁

- 1 暗褐色粗粒砂
- 2 灰黄褐色粗粒砂
- 3 黑褐色粗粒砂
- I 表土・搅乱
- II 褐色中粒砂・にぶい黄褐色粗砂

図6 調査区全体図(1/80)

### 第3節 遺構(図7～8、図版1～4)

#### 1 概要

今回の調査では、溝(S D)2条、土坑(S K)12基、不明遺構(S X)2基を検出した。いずれもII層上面の遺構である。出土遺物と堆積状況の検討から、主に中世・近世の遺構と考えられる。以下、遺構の特徴について記述する。

#### 2 溝

**S D 05** 調査区の東側で検出した。東壁付近は方形の搅乱を受け、西側はS X 02に切られる。溝の主軸は東西方向で、長さ1.02m以上、幅0.42m、深さ0.2～0.5mを測る。遺構内にはピットが2か所ある。ピットはいずれも直径0.6～0.7mである。ピット間の距離は約1.5mである。断面から、ピットは溝の下部から検出したため、溝の形成前にピットが形成されたと考えられる。埋土から須恵器・中世土師器・唐津、ピットから近世土師器・越中瀬戸・砥石、方形の搅乱から近代瀬戸美濃・瓦質土器が出土した。埋土には炭化物を含む。遺物の年代から、ピットは16世紀末～17世紀初頭、方形の搅乱は19世紀頃、遺構の土層関係より、溝は17世紀以降に形成されたと推定される。須恵器・中世土師器は周辺からの流れ込みであると考えられる。

**S D 06** 調査区の東側で検出した。平面では南北方向と途中で東方向へ伸びる。断面から、調査区南東隅付近で、溝が南北方向から東西方向へ折れることを確認した。南北方向の溝は長さ3.04m以上、幅0.78m、東西方向の溝は長さ1.02m以上、幅0.59mである。深さは0.19～0.28mを測る。溝の断面(図6、図7)は、南北方向が緩やかな皿状、東西方向が台形状を呈する。溝の中にはピットが1か所あり、埋土が単層であることから、溝とピットは同時期に形成されたと考えられる。遺物は中世土師器、不明陶器が出土した。遺物の年代から、13世紀～14世紀の遺構と考えられる。

#### 3 土坑

**S K 10** 調査区中央で検出した。長軸0.69m、短軸0.58m、深さ0.67mである。遺物は中世土師器が出土した。図化はしていないが、底部に静止糸切痕をもつ。古代～中世の遺構と考えられる。

**S K 11** 調査区中央西側で検出した。長軸0.56m、短軸0.34m、深さ0.37mである。遺物は中世土師器が出土した。遺物の年代から、14世紀半ばの遺構と考えられる。

**S K 12** 調査区西側で検出した。長軸0.35m、短軸0.27m、深さ0.21mである。遺物は出土していない。

**S K 13** 調査区中央東側で検出した。長軸1.04m、短軸0.67m、深さ0.5mである。遺物は中世土師器、珠洲が出土した。遺物の年代から、13世紀後半の遺構と考えられる。

**S K 14** 調査区東端で検出した。長軸0.49m以上、短軸0.23m以上、深さ0.4mである。遺物は中世土師器が出土した。中世の遺構と考えられる。

**S K 15** 調査区中央南西側で検出した。直径0.25m、深さ0.33mである。遺物は出土していない。

**S K 16** 調査区北東側で検出した。長軸0.44m、短軸0.37m、深さ0.11mである。遺物は出土していない。

**S K 17** 調査区北側で検出した。長軸1.36m、短軸1.09m、深さ0.33mである。S X 02の下部に形成される。遺物は出土していない。

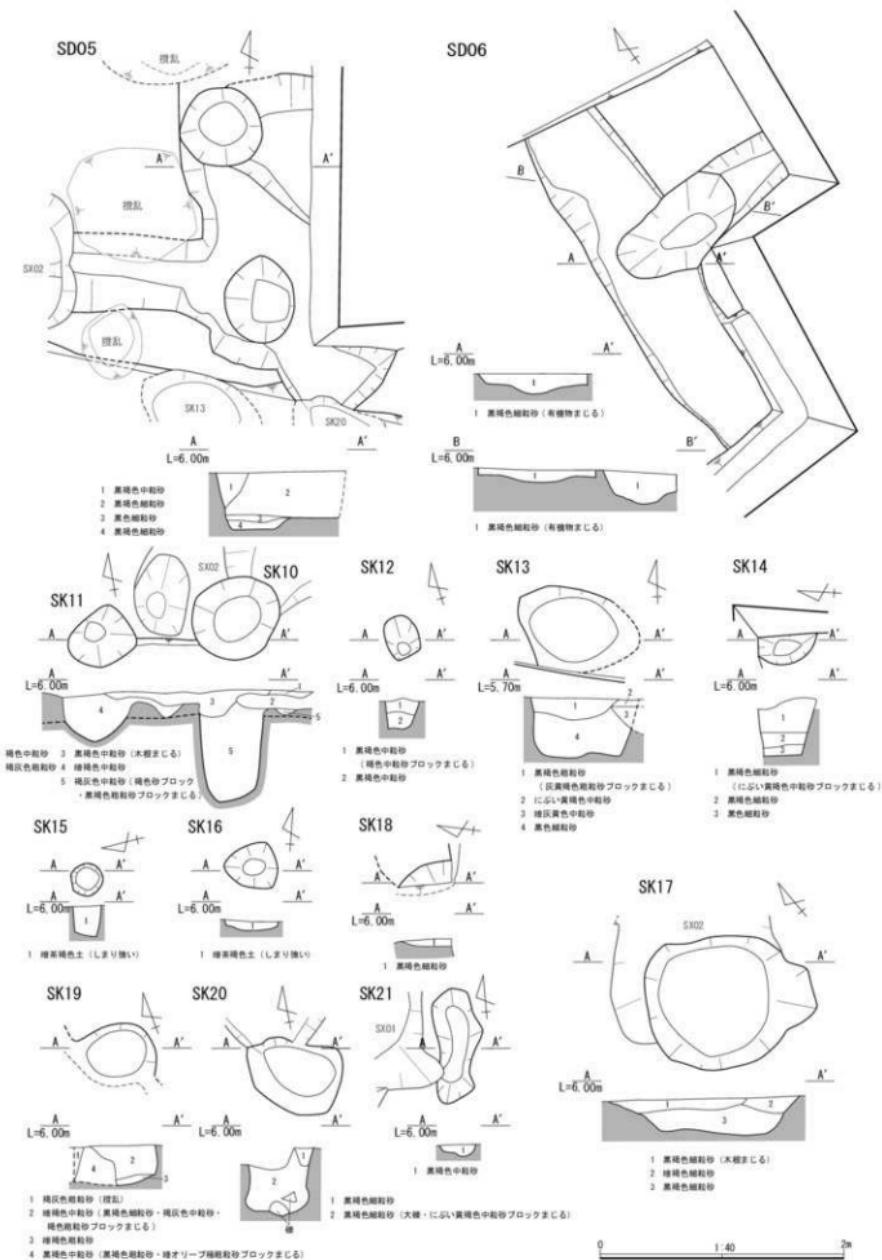


図7 造構(1)(1/40)

**S K 18** 調査区南側で検出した。長軸 0.44 m、短軸 0.18 m、深さ 0.06 m である。遺構南・西側は搅乱を受けている。遺物は時期不明土師器の細片が出土した。

**S K 19** 調査区南東側で検出した。長軸 0.71 m、短軸 0.51 m、深さ 0.33 m である。埋土に多量のブロックが混じる。遺物は出土していない。

**S K 20** 調査区東側で検出した。長軸 0.79 m、短軸 0.57 m、深さ 0.56 m である。地山直上に大礫が、埋土内に拳大の礫がある。遺物は中世土師器が出土した。遺物の年代から、14世紀前半の遺構と考えられる。

**S K 21** 調査区北西側で検出した。長軸 0.95 m、短軸 0.34 m、深さ 0.10 m である。遺物は出土していない。

#### 4 不明遺構

**S X 01** 調査区の北西側で検出した。検出長は南北 3.37 m、東西 2.20 m、深さ 0.58 m である。断面（図 6 西壁）では、土層が切り合う様子が見られることから、遺構の中に遺構が存在する可能性が考えられる。遺構北側は搅乱を受けている。遺物は古代須恵器（図 6 西壁第 6 層直上）、珠洲、近世土師器（図 6 西壁第 1 層）、唐津が出土した。埋土は炭化物を含む。遺物の年代から、古代～中世・17世紀の二時期に分けて形成されたと考えられる。

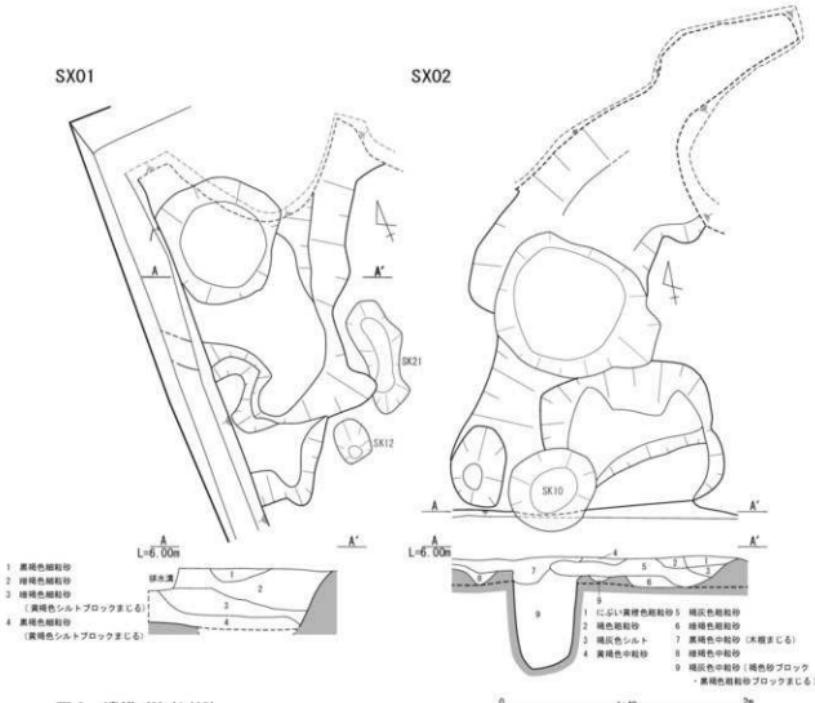


図 8 遺構 (2) (1/40)

**S X 02** 調査区の中央北側で検出した。長軸 3.93 m、短軸 2.24 m、深さ 0.18 ~ 0.38 m である。遺構の中にはピットが 1 か所あり、2 つの段が形成される。遺物は近世土師器・越中瀬戸・唐津、近世陶器、近代瀬戸美濃が出土した。遺物の年代から、17 世紀後半～18 世紀初頭の遺構と考えられる。

#### 第4節 遺 物（図 9、図版 5 ~ 6）

##### 1 概 要

出土遺物はコンテナケース（40 cm × 60 cm × 10 cm）3 箱分である。土器・陶磁器はほとんどが破片であるため、口径が復元できるものを中心に図化した。

遺物出土位置は、大きく遺構埋土層と表土（搅乱）層に分けられる。遺構内出土遺物は、古代・中世・近世の遺物が混在する。出土量が多いのは中世・近世の遺物である。表土（搅乱）層の出土遺物は近世～現代の遺物である。

なお、遺物の時期比定にあたっては主に次の文献を参考にした。中世土師器：森 2005、珠洲：吉岡 1994、近世土師器：堀内 2019、近世越中瀬戸：堀内 2017、宮田 1988・1997、九州陶磁器：九州近世陶磁学会 2000。

以下、遺構出土・遺構検出時、搅乱出土、試掘調査時出土に分けて記述する。

##### 2 遺構出土遺物

**S D 05** 1 は中世土師器の皿である。底部は平底で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は薄く仕上げる。口縁端部内面にヨコナデを施す。器形から森編年 B 類に属し、時期は 13 世紀頃と考えられる。2・3 は近世土師器の皿である。2 は内外面に油煙が付着する。灯明皿である。体部はやや内湾気味に開き、口縁端部を上方へ小さく摘まむ。口縁内部を一条のナデでおさめる。堀内編年 C 3 類に属し、時期は 16 世紀末～17 世紀である。3 は口縁部が直線的に開き、口縁端部は鋭くなる。4 は唐津の陶器皿である。口縁部が緩く内湾しながら外上方に開く。時期は 17 世紀以降と考えられる。5 は越中瀬戸の天目茶碗である。体部は丸みをもち、口縁部は外反する。口縁部内面に段をもつ。体部下半は無釉である。宮田編年 I 期に属し、時期は 16 世紀末～17 世紀前半である。6 は瓦質土器の火鉢の脚部である。外面は焼されて黒色を呈する。外面は半月状の窪みをもち、その下部をヨコナデしたのち、全体をタテナデ・ミガキ調整がなされる。内面にはミガキが施される。両端はケズリを行う。胎土に雲母、砂礫が混じる。時期は近世以降と考えられる。7 は瀬戸美濃の陶器瓶類で、徳利と考えられる。時期は 19 世紀後半である。

**S D 06** 8 は中世土師器の皿である。器高が低く、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は内湾し、口縁端部は丸くおさめる。胎土は白色を呈する。森編年 B 類に属し、時期は 13 ~ 14 世紀と推定される。

**S K 11** 9 は中世土師器の皿である。器高が低く、平底気味の底部から口縁部がやや内湾しながら立ち上がる。口縁端部外面はナデによって面を有する。森編年 B 類に属し、時期は 14 世紀半ばと考えられる。

**S K 13** 10 は珠洲の擂鉢である。胎土は粗粒砂が混じり、気泡が目立つ。焼成は不良である。鉢目は約 24 目と目が細かい。吉岡編年 III 期に属し、時期は 13 世紀後半と推定される。

**S K 14** 11 は中世土師器の皿である。口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部は鋭い。

**S K 20** 12 は中世土師器の皿である。器壁は薄く、体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。森編年 B 類に属し、時期は 14 世紀初頭と考えられる。13 は中世土師器の皿である。平底気味の底部から、体部が内湾しながら口縁部まで立ち上がる。口縁端部はやや尖り、口縁端

部外面はナデによって面を有する。森編年A類に属し、時期は14世紀初頭と考えられる。

**S X 01** 14は須恵器の甕である。外面に薄く自然釉が掛かる。15は珠洲の壺である。16・17は近世土師器の皿である。16は内外面に油煙が付着する。灯明皿である。丸底気味の底部から体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部はエビオサエで外反させる。口縁は丸くおさめる。堀内編年C3類に属する。17は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形である。口縁端部は上方向につまみ上げ、外面に面を有する。時期はいずれも17世紀である。18は唐津の陶器皿である。内外面に藁灰釉が掛かる。時期は17世紀前半である。

**S X 02** 19は唐津の陶胎染付碗である。時期は17世紀後半である。20は越中瀬戸の皿である。底部には回転糸切り痕がある。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口縁端部は平らにおさめ、口縁端部外面は面をもつ。内面は全面に、外面は体部に鉄釉を施す。堀内編年2期に属し、時期は18世紀初頭である。

### 3 整構検出時遺物

21は越中瀬戸の大皿である。内外面に藁灰釉がかかる。時期は17世紀と考えられる。22は瀬戸系の磁器碗である。内外面ともに透明釉が掛かり、外面には透明釉の上に謡曲の歌詞がデザインとして描かれる。胎土は白色で緻密である。23は瀬戸美濃の磁器皿である。24は越中丸山の磁器皿である。内外面ともに透明釉が掛かり、内面には手書きで色付けがなされる。22、23、24はいずれも時期は近代である。25は七輪の脚部である。全体の器形は不明である。外面にはナデ・ミガキを施し、内面には御目状条痕が見られる。両端は面取りがなされ、上部端面は内傾する。胎土に雲母が混じる。

### 4 掘乱出土遺物

26は珠洲の甕である。叩き目より吉岡編年III期に属し、時期は13世紀～14世紀と考えられる。27は越前の甕である。土塗り技法により外面が赤く発色する。時期は17世紀頃と推定される。28は伊万里の磁器皿である。内外面に透明釉が掛かる。胎土は暗灰色である。29は志野の猪口である。内外面に志野釉が掛かり、口縁端部には鉄釉が掛かる。30は京焼風唐津の碗である。見込みに蛇の目剥剥ぎが見られる。時期は17世紀末～18世紀初頭と考えられる。

### 5 表採遺物

31は美濃の磁器皿である。統制陶器である。底部に「岐 / □ 38」が記される。32は肥前系の磁器端反碗である。口縁部内面付近には斜格子文、外面全体には唐草文が描かれる。胎土は暗灰色である。33は不明陶器である。形状から香炉と考えられる。34は砥石である。目が細かいため仕上げ砥と考えられる。

### 6 試掘調査出土遺物

35は土師器の甕である。36は近世土師器の皿である。体部がやや内湾ながら口縁部は弱いナデによって外反する。口縁端部は上方につまみ上げる。堀内編年C類に属し、時期は16世紀後半～17世紀である。37は越中瀬戸の皿である。内外面に灰釉が掛かり、口縁端部には鉄釉が掛かる。時期は17世紀中頃である。38は越中瀬戸の丸碗である。体部下半は丸みを帯び、口縁部が直線的に立ち上がる。内外面に鉄釉が掛かり、焼き膨れが見られる。39は瀬戸系の磁器碗である。外面には山水図が描かれる。

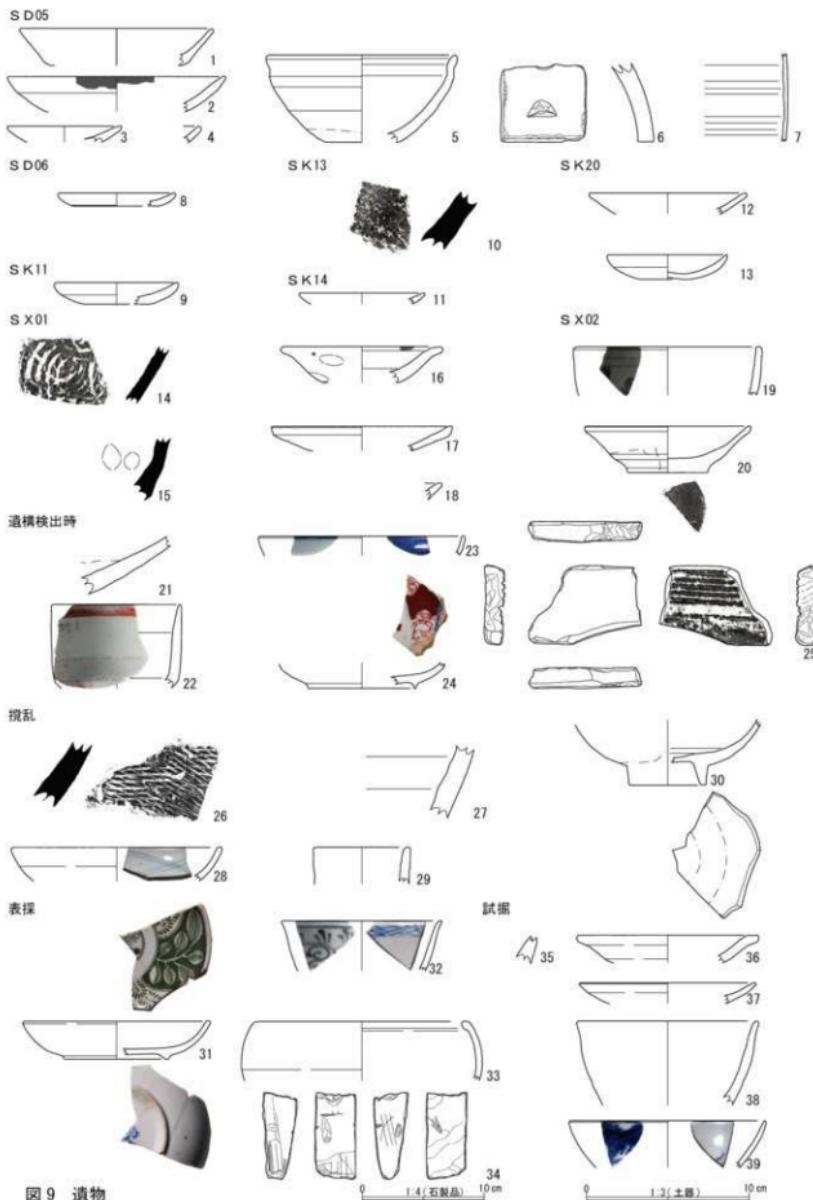


図9 遺物

表1 遺物観察表

番号	種別	器種	出土遺物	法量 (cm) ( ) 内・外径	輪	成形・調節・装飾等		色調 内面 外面	備考
						内面	外面		
1	中世土師器	壺	S D 0 5	口径: (1.8), 器高: (2.3)底径: -	ナゲ	ヨコナヂ、ナヂ	10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	
2	近世土師器	灯明皿	S D 0 5	口径: (1.3), 器高: (2.2)底径: -	ナゲ	ヨコナヂ、ナヂ	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	油燈付着
3	近世土師器	壺	S D 0 5	口径: (6.8), 器高: (1.65)底径: -	ナゲ	ナヂ	2.5YR5/4 にぶい黄褐色	10YR7/2 にぶい黄褐色	断続面削化
4	唐津	陶器皿	S D 0 5	口径: (1.0), 器高: (0.85)底径: -	灰釉	ロクロナヂ	ロクロナヂ	1.0YR4/3 にぶい黄褐色	新土: 2.5YR5/1 黄褐色
5	越中瀬戸	天日茶碗	S D 0 5	口径: (11.4), 器高: (5.30)底径: -	鉢袖	ロクロナヂ	ロクロナヂ	7.5YR2/1 黒	7.5YR2/2 新土: 7.5YR6/6 極黒
6	丘賀文部	火鉢脚部	S D 0 5	幅: 5.3, 器高: (4.80)草さ: 1.05	ナヂ、ミガキ	ナヂ、ミガキ	7.5YR5/4 にぶい黒	7.5YR5/4 にぶい黒	保村署 新土: 金葉母 砂礫古付
7	瀬戸美濃	陶器瓶	S D 0 5	口径: -, 器高: (5.4)底径: -	灰釉	ロクロナヂ	ロクロナヂ	10YR7/2 灰白	10YR7/2 灰白
8	中世土師器	壺	S D 0 6	口径: (7.0), 器高: (0.8)底径: -	ナゲ	ヨコナヂ、ナヂ	10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	
9	中世土師器	壺	S K 1 1	口径: (7.4), 器高: (1.35)底径: (5.8)	ナゲ	ヨコナヂ、ナヂ	10YR7/2 にぶい黄褐色	7.5YR7/3 にぶい黄褐色	
10	唐津	桶鉢	S K 1 3	口径: -, 器高: (3.0)底径: -	ロクロナヂ	ロクロナヂ	2.5YR7/1 灰白	NS/灰	即日約2.4日
11	中世土師器	壺	S K 1 4	口径: (7.6), 器高: (0.7)底径: -	ナヂ	ヨコナヂ、ナヂ	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	
12	中世土師器	壺	S K 2 0	口径: (9.6), 器高: (1.3)底径: -	ナゲ	ヨコナヂ、ナヂ	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	
13	中世土師器	壺	S K 2 0	口径: (7.3), 器高: (1.5)底径: (2.65)	ナゲ	ヨコナヂ、ナヂ	10YR8/1 灰白	10YR8/2 灰白	
14	須恵器	甕	S X 0 1	口径: -, 器高: (3.2)底径: -	自然釉	同心円凸凹具	ロクロナヂ	2.5YR5/1 灰白	2.5YR5/1 灰白
15	唐津	甕	S X 0 1	口径: -, 器高: (3.7)底径: -	ヨコオサナ	ロクロナヂ	NS/灰	NS/灰	
16	近世土師器	灯明皿	S X 0 1	口径: (9.6), 器高: (2.2)底径: -	ナゲ	ヨコナヂ、ナヂ ナビオサナ	10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白	油燈付着
17	近世土師器	甕	S X 0 1	口径: (11.0), 器高: (1.3)底径: -	ナゲ	ヨコナヂ、ナヂ	9YR2/4 にぶい黄褐色	3YR7/4 にぶい黄褐色	
18	唐津	陶器皿	S X 0 1	口径: -, 器高: (1.0)底径: -	灰釉	ロクロナヂ	ロクロナヂ	2.5YR7/1 灰白	新土: 5YR6/1 灰白
19	唐津	陶軒丸染付壺	S X 0 2	口径: (11.0), 器高: (3.0)透明釉	透明釉	ロクロナヂ ヨコナヂ、忍足	ロクロナヂ	10YR6/1 灰白	10YR6/1 灰白
20	越中瀬戸	甕	S X 0 2	口径: (9.85), 器高: 2.85 底径: (4.65)	透明釉	ロクロナヂ	ロクロナヂ	2.5YR4/3 にぶい黄褐色	断続面削み切り 10YR7/4 にぶい黄褐色
21	越中瀬戸	大甕、造拂拭出時	口径: -, 器高: (3.5)底径: -	灰釉	ロクロナヂ	ロクロナヂ	7.5YR7/1 灰白 9YR1/6 市原	7.5YR7/1 灰白	新土: 7.5YR7/6 極
22	瀬戸系	磁器碗	造拂拭出時	口径: (7.8), 器高: (5.10)透明釉	透明釉	ロクロナヂ	ロクロナヂ	NS/灰白	未詰留器體内に墨 記文(萬葉抄)の有 無い辨別
23	瀬戸系	磁器皿	造拂拭出時	口径: (12.4), 器高: (1.17)透明釉	透明釉	ロクロナヂ	ロクロナヂ	NS/灰白	NS/灰白
24	越中丸山	磁器皿	造拂拭出時	口径: -, 器高: (1.6)底径: (6.6)	透明釉	ロクロナヂ 重圓腹、山水圖か	ロクロナヂ	NS/灰白	未詰留器體内に墨 記文(萬葉抄)の有 無い辨別
25	土製品	七輪脚部	造拂拭出時	最大幅: 6.9, 残存高: 4.9 底径: 1.3	ナヂ、ミガキ 扣状条痕	ナヂ、ミガキ 扣状条痕	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	新土: 金葉母底 1~2mm織痕
26	唐津	甕	甕	口径: -, 器高: (3.95)底径: -	当て具	タタキ	NS/灰	NS/灰	
27	桔甫	甕	甕	口径: -, 器高: (4.18)底径: -	鉢袖	ロクロナヂ	ロクロナヂ	2.5YR4/2 透青黄 9YR2/2 透青黄	新土: 2.5YR4/2 透青黄
28	伊万里	磁器皿	甕	口径: (12.6), 器高: (2.17)底径: -	透明釉 忍足(裏)	ロクロナヂ 忍足(裏)	ロクロナヂ	NS/灰白	NS/灰白
29	志野	甕	甕	口径: (6.6), 器高: (2.3)底径: -	忍足 鉢袖 (口縁部)	ロクロナヂ	ロクロナヂ	NS/灰白 2.5YR4/6 市原	新土: 2.5YR2/8 灰白
30	唐津 (京焼風店舗)	甕	甕	口径: (4.05)底径: (4.6)	灰釉	ロクロナヂ	ロクロナヂ	2.5YR7/3 透黄 2.5YR6/4 にぶい黄褐色	重ね燒き瓶 削出高台 新土: 2.5YR2/8 灰白 高台内: 壱/口 灰白
31	美濃 (絹割御器)	磁器皿	表揮	口径: (11.4), 器高: 2.25 底径: (6.4)	透明釉 神紋に草花	ロクロナヂ 緑色繪 神紋に草花	ロクロナヂ	NS/灰白	NS/灰白
32	肥前系	磁器皿	表揮	口径: (9.8), 器高: (3.1)底径: -	透明釉 忍足	ロクロナヂ 忍足	ロクロナヂ 忍足	NS/灰白	
33	土製品 (香炉)	不明	表揮	口径: (13.2), 器高: (3.65)底径: -	透明釉	ロクロナヂ	ロクロナヂ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白
34	石製品	硯石	表揮	最大幅: 7.15, 底幅: 3.3 底径: 2.8					硯石 4面に擦痕
35	土師器	甕	試器	口径: -, 器高: (1.65)底径: -	-	-	10YR7/2 にぶい黄褐色	10YR7/2 にぶい黄褐色	摩擦
36	近世土師器	甕	試器	口径: (11.0), 器高: (1.7)底径: -	ヨコナヂ、ナヂ	ヨコナヂ	10YR7/2 にぶい黄褐色	10YR7/2 にぶい黄褐色	外側磨耗 削除跡に
37	越中瀬戸	甕	試器	口径: (10.7), 器高: (1.30)底径: -	区輪 鉢袖 (口縁部)	ロクロナヂ	ロクロナヂ	5YR7/4 透黄 5YR4/6 市原	新土: 7.5YR7/6 極
38	越中瀬戸	角瓶	試器	口径: (11.6), 器高: (5.2)底径: -	鉢袖	ロクロナヂ	ロクロナヂ	5YR4/3 にぶい黄褐色	新土: 5YR7/1 灰白
39	瀬戸系	磁器皿	試器	口径: (12.0), 器高: (2.9)底径: -	ナイトウ 忍足	ロクロナヂ	ロクロナヂ	NS/灰白	NS/灰白

## 第4章 総括

### 第1節 遺構・遺物

今回の調査では、砂層の地山から溝2条、土坑12基、不明遺構2基を検出した。遺物包含層は確認しなかった。主な出土遺物は中世・近世の土器・陶磁器である。また、わずかではあるが古代の土器も出土した。

本節では、出土遺物から年代が分かる遺構を中心に整理し、年代ごとに調査成果を総括する。

#### 1 年代

検出遺構の年代は、出土遺物の種類や器種、出土位置等から判断して、概ね13世紀～14世紀(S D 06・S K 10・S K 11・S K 13・S K 20)、16世紀後半～17世紀(S D 05・S X 01・S X 02)、19世紀以降(S D 05・S X 02)に大別できる。

#### 2 性格

13世紀～14世紀の遺構 遺構は調査区中央～南に集中する。S D 06は、溝が東西方向と南北方向に直交し、東西方向の溝が南北方向の溝に比べて幅や深さが大きい。埋土には有機物が含まれている。また、遺物の出土量は少ない。これらのことから、S D 06は東西方向の溝を主とした耕作に関連する区画溝(水路)の可能性がある。

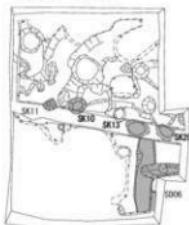
土坑群は東西方向にはほぼ一直線上に位置し、S K 10・S K 11、S K 13・S K 20の2基一組の遺構群として捉えられる。2基間の距離は、土坑中心から計測してS K 10・S K 11で約1.2m、S K 13・S K 20で約1.3m(約4尺)である。二組間の距離は、約2.6m(約1間3尺)である。具体的な用途は不明であるが、土坑の配置から建物跡の可能性がある。

16世紀後半～17世紀の遺構 遺構は調査区北に集中する。S D 05は搅乱を受けるものの、東西方向の溝が確認される。また、溝の中にはピットが5尺間隔で2基見られる。これらの形状から布掘り建物跡と考えられる。遺物では、灯明皿や唐津皿などの日常雑器が出土した。これらのことから、日常生活に関わる遺構の可能性がある。

S X 01では近世土師器や唐津が出土していることから、S D 05と同様な性格の遺構と考えられるが、埋土からは近世遺物のほかに須恵器・珠洲といった古様相の遺物が出土したため、他より古相の遺構の可能性がある。S X 02では、17世紀後半の越中瀬戸や唐津などの陶磁器が出土することから、S D 05と同様な性格の遺構と考えられる。

その他 S K 19は他の土坑とは違い、埋土に多量のブロックが混じることから、人為的に埋められた可能性が考えられる。遺物が出土していないため、時期については判断できなかった。

13世紀～14世紀



16世紀後半～17世紀

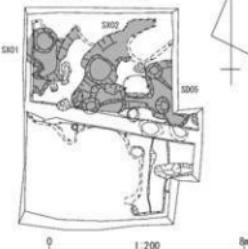


図10 遺構変遷図(1/200)

## 第2節　まとめ

**周辺の遺跡との検討** 今回の調査では、13世紀～14世紀、16世紀後半～17世紀前半にかけての遺構・遺物を確認した。調査成果を総括すると、本遺跡周辺は古代から徐々に人々が生活を始め、13～14世紀頃には耕作地として機能し、16世紀末から生活を営む様子を想定できる。また、出土遺物には天目茶碗や灯明皿などがあることから、16世紀～17世紀の本遺跡周辺では、茶を嗜む階級の人々が存在した可能性が指摘できる。

本遺跡周辺に注目すると中世集落とされる遺跡に、宮条南遺跡や針原中町II遺跡が挙げられる。宮条南遺跡は15世紀後半に本格的に集落が形成され、16世紀頃まで継続する（富山市教委1997）。針原中町II遺跡は、14世紀から本格的に集落が形成され、15世紀～16世紀に最盛期を迎える、17世紀前半に廃絶する（富山市教委2000b）。これらの集落の存続時期は、平樅城が所在した時期と合致することから、これらの遺跡は平樅城に関連した常願寺川沿いの集落の可能性が考えられる。高島遺跡は、これら集落が存続した時期よりも下ることから、戦乱が収束した時代に営まれた新しい集落であると考えられる。

## 引用・参考文献

- 富山市教育委員会 1984『飯野新屋遺跡発掘調査概要』  
富山市教育委員会 1987『富山市飯野新屋遺跡』  
富山市教育委員会 1994a『富山市浜黒崎悪地遺跡発掘調査概要』  
富山市教育委員会 1994b『富山市宮町遺跡（平成6年度）現地説明会資料』  
富山市教育委員会 1995『富山市飯野新屋遺跡発掘調査概要』  
富山市教育委員会 1996「1. 野田・平樅遺跡」「富山市野田・平樅遺跡 野中新長幅遺跡 宮条南遺跡 高島島浦遺跡」  
富山市教育委員会 1997『宮条南遺跡 高島島浦遺跡 針原中町I遺跡 針原中町II遺跡』  
富山市教育委員会 1998a『富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要』  
富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会 1998b『富山市水橋荒町遺跡発掘調査概要 I』  
富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会 1999『富山市水橋荒町遺跡発掘調査概要 II』  
富山市教育委員会 2000a『富山市小西北遺跡発掘調査概要』  
富山市教育委員会 2000b『富山市針原中町II遺跡発掘調査概要』  
富山市教育委員会 2002a『岩瀬天神遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2002b『富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2005『富山市小西北遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2006『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2007『II 宮町遺跡』『富山市内遺跡発掘調査概要 II』  
富山市教育委員会 2012『II 米田大覚遺跡』『富山市内遺跡発掘調査概要 VI』  
富山市教育委員会 2013『I 宮条南遺跡』『富山市内遺跡発掘調査概要 VII』  
富山市教育委員会 2019『富山市米田南田遺跡発掘調査報告書』
- 九州陶磁学会 2000『九州陶の編年一九州近世陶磁学会10周年記念一』  
館盛英夫 1980『平樅城』  
野垣好史 2005『縄文人の低地への進出 水橋荒町・辻ヶ堂遺跡』『富山市の遺跡物語』富山市教育委員会 埋蔵文化財センター所報No.6  
藤田富士夫・駒見和夫 1881『ちょうどよう塚の概要と若干の考察』『大境』第7号 富山考古学会  
古川知明 1995『最新の発掘成果から』『富山市考古資料館報No.27』  
古川知明 2000「8 宮町遺跡・9 小西北遺跡」『大境第20・21号 創立50周年記念合併号』富山考古学会  
堀内大介 2017「近世土師器皿・越中瀬戸素焼皿の集成」『富山市考古資料館紀要』第36号  
堀内大介 2019「越中における近世成立期の土師器皿の諸様相—富山城出土資料から—」『北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相—城下町とその周辺遺跡の土師器皿（かわらけ）を中心に—』公益財團法人石川県埋蔵文化財センター  
堀沢祐一 2003「越中国の律令祭祀具と官衙遺跡」『續文化財學論集 第一分冊』文化財學論集刊行会  
宮田進一 1988『越中瀬戸の窯資料(1)』『大境』富山考古学会  
宮田進一 1997『越中瀬戸の変遷と分布』『中・近世の北陸』桂書房  
森 隆 2005『富山県の中世土器（資料編2）』『富山考古学研究』第8号 地方富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所  
吉岡康鷹 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館



調査区全景（南から）

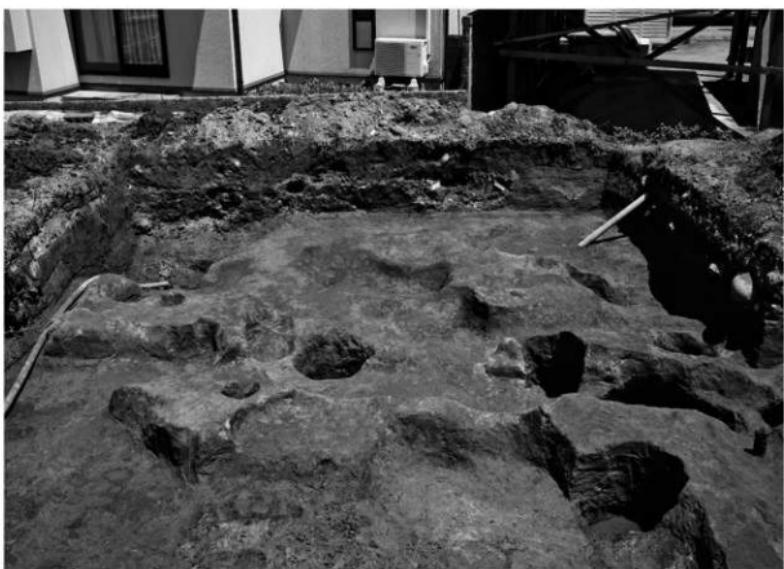
図版2  
調査区完掘状況



調査区完掘（北東から）



調査区完掘（南から）

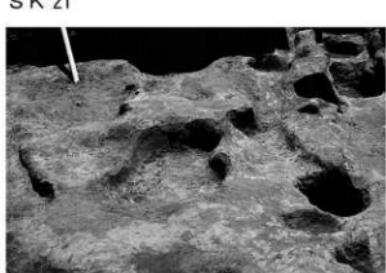
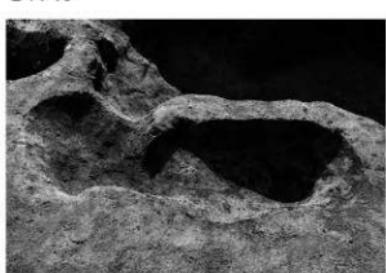
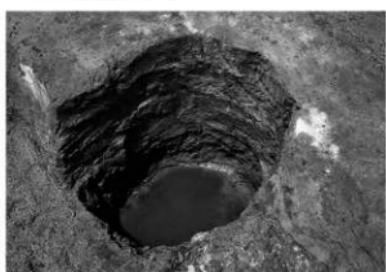


調査区近景（南から）



調査区近景（南東から）

図版  
4  
遺構





出土遺物外面

(2)



出土遺物內面

## 報 告 書 抄 錄

富山市埋蔵文化財調査報告 100

富山市内遺跡発掘調査概要 22

—高島遺跡—

2020 年 3 月 31 日 発行

発 行 富山市教育委員会

編 集 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒 939-2798 富山県富山市婦中町速星 754

TEL:076-465-2146 FAX:076-465-5032

E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印 刷 中央印刷株式会社